

ウェスレーの神学における先行的恵みに関する一考察

梅田 昇

序文

「先行的恵み」(prevenient grace, preventing grace)の教理は、ウェスレーの神学において、非常に重要であり、救いに先行する神の恵みのことである。スティーブ・ハーパー氏は、『現代に語るウェスレー神学』の中で、「先行的恵みの教理は、神が人間を救うための最初のステップをとられたということです」¹とわかりやすく説明している。全的に腐敗し、神に応答する能力を失っている罪人は、どのようにして神の救いの招きに対して応答できるのであろうか。これが先行的恵みと関係している。神が備えられた恵みによって、罪人は神に応答することができ、救いにいれられる。ハーパー氏はウェスレーの先行的恵みを(1)神のみこころに対して最初の敏感さを生み出すこと、(2)神のみこころに違反したというわずかな、一時的な認罪感を与えること、(3)神を喜ばそうとする最初の願いを起すことの3つの働きに整理している。² 清水光雄氏は先行的恵みについて「罪の奴隷としてこの世に誕

¹ スティーブ・ハーパー『現代に語るウェスレー神学』(福音文書刊行会, 2004年)、p.35、ハーパー氏は、救いの順序という枠組みを使い、ウェスレーの神学を見事に整理している。3章において「第一歩を踏み出す力」という表題の下で先行的恵みについて論じている。

² 上掲書、p.38.

生した人間は先行的恩恵によって思考と意志、自由の諸機能が潜在的に回復され、（先行の恩恵の第一の働き）、この諸機能によって救いに導こうとする神の更なる恵み（先行の恩恵の第二の働き）に応答・拒否し得る者とされている³と説明している。人は先行的恵みの故に、認罪と悔い改めに導かれ、キリストに対する信仰、そして義認に導かれる。野呂芳男氏は『ジョン・ウェスレー』の中で「ウェスレー神学においては、厳密な意味での信者の生涯は、神の恵みを獲得した時に始まるのであるが、その義認の恩恵を信者が獲得する前に、すでに神の先行の恵みはその人の生涯の中で、働いていたわけである⁴と整理している。この先行的恵みの故に、人は神の招きに応答し、悔い改めて救われることができるのである。

この先行的恵みはカルヴァン主義神学では教えられておらず、ウェスレーの神学の特徴的な教えであり、両者を分ける分水嶺となっている。⁵ カルヴァンは『キリスト教綱要』の中で、神が働きかける恵みと協力する恵みについて言及しつつ、「恩寵によって、本当に選ばれた者だけが新生を通して受ける特別な恩寵によって助けを受けなければ、自由意志はどの人にも良い行いをさせることはできないことは議論の余地がない⁶と述べている。特別な恩寵は、選ばれた者に与えられるとカルヴァンは理解していた。カルヴァン以降、彼の神学は発展修正し、「一般恩寵 common grace」と「救いの恩寵 redeeming grace」を分けて理解するようになったと考えられる。いわゆるウエスレアン・アルミニアン神学では、それらを統合して「先行的恵み

³ 清水光雄『ウェスレーの救済論：西方と東方キリスト教思想の統合』（教文館、2002年）、P.105。清水光雄氏はウェスレーの先行的恵みの理解が、ペラギアン主義やセミ・ペラギアン主義の理解とは全く異なっていることを指摘している。

⁴ 野呂芳男『ジョン・ウェスレー』（松鶴亭、2005年）、p.156。

⁵ H. オートン・ワイラー/P. T. カルバートン『キリスト教神学概論』（日本ウェスレー出版協会、1977年）、p.334。カルヴァンの恩寵に対する理解が、原罪を神学体系の基礎としたアウグスチヌスから由来していることが論じられている。アウグスチヌスは悪に向けての自由意志を主張したものの、恵みによる救いが強調された。結果、カルヴァン神学では神の恵みに強調点が置かれた。

⁶ ジョン・カルヴァン『キリスト教綱要』（新教出版社、2007年）

<http://www.reformed.org/master/index.html?mainframe=/books/institutes/>

prevenient grace」という概念で理解し、与えられた恵みに応答することによって、救いへと導かれるのであると教えている。

ウェスレーの神学では先行的恵みはすべての人に与えられ、拒絶できると教えている。スターキーはウェスレーの聖霊の神学を論ずる中で、先行的恵みについて「ウェスレーによれば、人間の倫理的な感覚と選択の自由を回復する聖霊の先行的恩恵というものが、ひとりびとりに生来的に与えられており、これによって人間は自己のなすべき義務を知らされ、助力と救いを求めて神のもとに帰ることができるのである」⁷と述べている。ロバート・タートルは「ウェスレー神学の体系は、原罪と先行的恵みの教理の上に築かれている」⁸と述べて、先行的恵みの教理がウェスレー神学の中で、重要な位置を占めていることを強調している。

ウェスレーは、メソジスト運動を開始してまもなく、カルヴァン神学の立場に立つジョージ・ホイットフィールド氏などの神学的な論争に巻き込まれた。そのような神学的論争を通して、ウェスレーはカルヴァン神学との共通点や違い、問題点を見抜くに至ったわけである。ウェスレーの神学とカルヴァン神学の間において、聖書の権威、神の主権と愛、三位一体、キリストによる救い、人間の全的な墮落など、多くの点で共通している。ウェスレーは1745年8月2日、メソジストの集まりにおいて、メソジズムがカルヴァン神学と髪の毛一本の幅の違いに過ぎないと述べている。⁹ ウェスレーの神学とカルヴァン神学の根本的な相違はこの先行的恵みと言えるのである。¹⁰ 従って、ウェスレーの神学を理解しようとする者にとっては、先行的恵みの理解は重要となる。

⁷ L.M.スターキー『ウェスレーの聖霊の神学』（新教出版社、1985年）、p. 58

⁸ ハーパー『現代に語るウェスレー神学』、p.35.

⁹ John. Wesley. *The Works of John Wesley*. 14 Vols. Edited by Thomas Jackson. Grand Rapids: Baker Book House, 1986. Vol. VIII, pp. 284-5. (以下 Works)

¹⁰ Kenneth J. Collins, *The Scripture Way of Salvation: The Heart of John Wesley's Theology*. Nashville: Abingdon Press, 1997, p.38-39. ウェスレーの説教の中心であると言われる「聖書の救いの道」を取り上げ、丁寧にウェスレーの救いの神学を論じている。

I. ウェスレーの「先行的恵み」に関する教え

ウェスレーが先行的恵みについてどのように教えているかについて検証してみよう。ウェスレーは、「**律法の原型、性質、属性、使用**」(1741年)という説教の中で、「律法によって罪人に認罪を与えるのが、神の霊が用いられる通常な方法である」¹¹と述べている。聖霊は律法を通して、語りかけ、認罪、救いに導くことがある。マック・ストークスは、『ウェスレアン伝統における聖霊』という本の中で、聖霊と先行的恵みの関係について、「救いは、選ばれた限定的な人のためだけでなく、すべての人のためである。聖霊がすべての人間のうちに、この準備的な段階(先行的恵み)において働いているので、救いは可能なのである」¹²と述べている。先行的な恵みはまさに聖霊の働きだと言える。

ウェスレーは、John Mason氏に宛てた手紙(1776年)において、カルヴィニストの不合理性を批判したうえで、先行的恵みについて「生きているもので、先行的恵みを受けていないものではなく、またあらゆる恵みは人間の生から離れてはありえない」¹³と言及している。

ウェスレーは「**神より生まれた者の偉大な特権**」(1748年)という説教において、「神は、ご自身の祝福を持って私たちに先行されます(prevent)。まず、神が私たちを愛し、ご自身を示されます。また私たちが遠くいるのに、

¹¹ 『ジョン・ウェスレー説教 53(下)』、26; John Wesley. *The Works of John Wesley*. Volume I-IV. Edited by Albert Outler. Nashville: Abingdon Press, 1984-87. II:15(以下、BE Worksと略する); Works V:443

¹² Mack B. Stokes, *The Holy Spirit in the Wesleyan Heritage* (Nashville, Abingdon Press, 1985), p.47.

¹³ John Wesley, *The Letters of John Wesley* (London: The Epworth Press, 1960), V:239; Works XII:453. ウェスレーは、メソジストの論客ジョン・フレッチャーが著わした *Checks to Antinomianism* がカルヴァン主義の問題点を指摘しながら、先行的恵みを主張していることを John Mason氏に書き送っている。この先行的恵みの故に、家々を訪問して伝道するように励ましている。先行的恵みの正しい理解は、信仰者を伝道への重荷へと駆り立てる。

神は私たちをご自身の元に呼び寄せ、私たちの心を照らしてくださいます」¹⁴ と述べている。人の応答が聖霊によって可能であり、神は救いに先立って働いてくださる。

ウエスレーは「**聖書における救いの道**」(1772年)という説教において、「先行的恵みは、父なる神の『引き寄せる』(ヨハネ 6:44 参)働きをすべて指します。それは神を求める欲求として現れ、もし私たちがそれに応じるなら、この欲求はますます増大します…またそれは、神の霊がすべての人の子の中に、しばしば起こさせる罪の自覚を指します」¹⁵と言及している。聖霊を通してなされる先行的恵みは、人を神に近づける。もちろん、先行的な恵みを無視したり、否定して、救いを拒む人がいることもウエスレーは言及していて、決してこの先行的恵みは絶対的なものではない。エドワード・スグデンは、この説教に関して、興味深いコメントを残している。「先行的、あるいは、先立つ恵みは、ウエスレーの神学において、最も重要である。ペラギウスに対して、人間の墮落を主張し、その結果、悔い改め、神に立ち帰る力を持っていないと主張する。カルヴァン主義に対しては、先行的恵みがすべての人に与えられ、人が願うならば、悔い改め、神に立ち帰ることができる」と主張する。¹⁶ ウエスレーは、ペラギウス主義やカルヴァン主義とも一定の距離を保ち、全的に墮落した人間に働く神の恵みを強調し、聖霊を通して働く先行的恵みにより、人は神に悔い改め、応答できることを教えたのである。アウトラーは、ウエスレーの神学的立場について、「ウエスレーを突き動かしていた情熱は、ペラギウスの樂觀主義でもアウガスチヌスの悲観主義でもない第三の道を発見することであった」¹⁷と興味深く述べている。ウエスレー神学は主として全的墮落と先行的恵みによる人間の応答によって構成されている。

ウエスレーは「**自分自身の救いを全うすることについて**」(1785年)という説教において、「救いは、通常先行的恵みから始まり、それは神のみこころ

¹⁴ 『ジョン・ウエスレー説教 53 (中)』、p. 66 ; BE Works I:442.

¹⁵ 『ジョン・ウエスレー説教 53 (下)』、p. 246; BE Works II:156~157.

¹⁶ Edward Sugden, *Wesley's Standard Sermons* (Grand Rapids: Francis Asbury Press, 1995)、II:445 注 2

¹⁷ Albert Outler, ed., *John Wesley* (New York: Oxford, 1964), 9, n. 26.

に対する最初の光のともしび、神に対して罪を犯したという最初の自覚を意味する」¹⁸と先行的恵みについて述べている。人間は自分の罪について気付かせようとする小さな光、それは良心の働きであるかもしれないが、聖霊が働いておられるというのである。原罪と信仰による義認を結びつける解決の道が先行的恵みであるとウェスレーは理解した。ウェスレーは、生涯の折々に先行的恵みについて強調したのである。

II. ウェスレーに先立つ「先行的恵み」に関する教え

ウェスレーは、英国国教会の教育と伝統の中で生きたのであるが、彼が「先行的恵み」を受け入れる当たり、彼に先立つ教えがあったことは否定できない。ウェスレーは、どこから「先行的恵み」に関する概念を得るに至ったのだろうか。そのことを吟味することにする。

A. 初代教父マカリウスの影響：偉大なウェスレー研究者であるアウトラーは、ウェスレーが初代教父たちの著作から多くを学んだことを指摘し、ウェスレー研究に新しい光を投げかけたことで知られているが、ジョージアに滞在していた頃に、マカリウスの著作に接し、神学的な影響を受けたことを指摘している。¹⁹

チャールズ・ロジャーは、“The Concept of Prevenient Grace in the Theology of John Wesley” という博士論文の中で、ウェスレーは初期の初代教父、とりわけエジプトのマカリウスの著作に接し、先行的恵みに関して影響を受けたことを分析している。1721年、The Homilies of Macarius が英国で出版され、ウェスレーはこれ入手し、1736年頃、ウェスレーはジョージア時代にマカリウスの The Homilies of Macarius を読み、1749年から55年にかけて出版したクリスチャン・ライブラリーの中に、マカリウスの著作を含めている²⁰。このことから、ウェスレーが先行的恵みに関しても、マカリウスの影響をかなり受けたことがわかる。例えば、マカリウスは、The Homilies of Macarius IX章において次のように述べている。「神

¹⁸ BE Works III: 203; Works VI: 509.

¹⁹ Albert Outler, ed., *John Wesley* (New York: Oxford, 1964), 9, n. 26.

の恵みの霊的な影響は、大きな忍耐、知恵、思いの神秘的な管理をもって働いている。一方、人は長い間、大きな忍耐をもって歩んでいる。それで、恵みの働きは、彼において完全であることが証明される。彼の自由意思と選択は、多くの試練によって御霊に受け入れられることが明らかにされる」²¹。マカリウスは、神の恵みと人間の自由意思を健全に整理しているように思われ、ウェスレーもこのような神人協働説的な見解を受け入れたのであろう。

クローズキー (Mark T. Kurowski) は「The First Step Toward Grace: John Wesley's Use of the Spiritual Homilies of Macarius the Great」という論文を著わして、先行的恵みに関して、ウェスレーに対するマカリウスの強い影響があったことを論じている。²² もちろん、ウェスレーは、マカリウスの思想にすべて同意したわけではなく、彼の教えに合致する範囲でマカリウスの教えを受け入れたのである。

ウェスレーは「**聖書における救いの道**」(1750年)という説教において、神の子どもたちの経験についてマカリウスの Homilies から引用し、神の恵みの働きについて説明を加えている。²³

「1400年前にマカリウスは、神の子どもたちの現在の体験を実に正確に、次のように描いています。『未熟な(未経験な)者たちは、恵みが働くとき、自分たちは罪をもっていないと直ちに想像する。しかし、思慮のある者であれば、神の恵みをもっている私たちがさえ再び悩まされることを否定できない…』というのは、こうした例を兄弟たちに見いだす。彼らは、もう罪はないというほど神の恵みを体験するのであるが、結局の所、自分はそれから全く自由であると思ったときに、

²⁰ <https://archive.org/details/fiftyspiritualho00pseuoft>を参照。

²¹ <http://archive.org/stream/fiftyspiritualho00pseuoft/fiftyspiritualho> IX章1を参照。

²² Mark Kuroauski, *The First Step Toward Grace: John Wesley's Use of the Spiritual Homilies of Macarius the Great*, *Methodist History* 36: 2(Jan. 1998):

²³ Sugden, *Wesley's Standard Sermons*, II: 447.

内に隠れていた罪が再び姿を現し、彼らを焼き尽くしてしまったのである』(Homily, IX 4)²⁴。

ウェスレーが先行的恵みに関してもマカリウスの影響をいかに受けていたことがわかる。もちろん、マカリウスだけでなく、ウェスレーは様々な教会教父から神学的な影響を受けたことを銘記する必要がある。アウトラーはウェスレーの神学的な源泉についての項目の中で、教会教父の影響について「ウェスレーは、東方の礼典よりも東方の霊性から多くを学んだのである。彼はそこに明白な聖霊論を見出し、後に神秘主義について考えをまとめる力となったのである。ここにウェスレーの先行的恵みと人間の自由についての最も明白な考えの源泉がある」²⁵と分析している。

B. ローマ・カトリック教会の立場: ローマ・カトリック教会内にも、先行的恵みを教える教理が存在した。トリエント公会議は教皇パウルス3世によって1545年3月15日にトリエントで召集され、1563年12月4日にピウス4世のもとで第25総会を最後に終了したカトリック教会の公会議である。諸事情により、多くの会期が断続的に行われたが、宗教改革に対するカトリック教会の姿勢を明確にし、対抗改革と言われるカトリック教会の刷新と自己改革の原動力となった。先行的恵みは、アルミニアン神学において、特徴的であるが、興味深いことにカトリックのトリエント公会議においても、この教理が論じられている。第六部5章の「成人の場合における義化への準備の必要性とその起源について」において論じられている。

「分別のある者にとって、この義化は、イエズス・キリストによる天主の先行的恩恵によって始まるものである(第3条)。言い換えれば、彼らの功德は少しもなかったが天主の招きによって始まるものであ

²⁴ 『ジョン・ウェスレー説教53』(下)、p. 249; BE Works II:159.

²⁵ Albert Outler, *John Wesley's Sermons: An Introduction*(Nashville: Abingdon Press, 1991). P. 82. これはアウトラーによって編集された Bicentennial Edition of the Works of John Wesley 中の4巻の説教の序言の複製である。

る。その結果彼らと呼ばひさせ、助ける天主の恩恵によって、罪をもって天主にそむいた者が、その恩恵に自由に同意し（第4、5条）、協力して、彼ら自身の義化に心を向けるように準備するのである。すなわち、天主が聖霊の照明をもって人の心に触れる時に、人はまったく何事もしないのではない。それを拒むこともできるのに、その靈感を受入れるのである。しかしながら、天主の恩恵なしに自分の自由意志だけでは、天主の義に自分を向けることができないのである（第3条）」²⁶

カルヴァン神学における神の主権と一方的選びが強調される中で、プロテスタント側にもカトリック側でも、先行的恵みを前提とした神人協働説を受け入れる動きがあったことがわかる。人間の応答や責任を否定あるいは軽視した極端なカルヴァン神学に対する反動が、プロテスタント側にもカトリック側にも起こっていた事実は興味深いと言えよう。

C.メランヒトンの神人協働説：メランヒトンは、ルター派神学の基礎を作った人であるが、神の主権と人の自由意志の關係に光を与えた人である。『ウェスレアン神学辞典』によれば、「神人協働説」(Synergism)は16世紀、フィリップ・メランヒトン(1497～1560)と彼の弟子によって、神学的概念として定着した。²⁷ 彼はルターに共鳴して1518年に宗教改革に参加し、直感的なルターに対し、メランヒトンは知性的であり、ルターを思想を体系化していく重要な役割を担ったのである。彼はプロテスタント教会の最初の信仰告白『アウクスブルク信仰告白』を1530年に執筆したが、次第にルターとの思想的相違が顕在化し、さらに後年には、メランヒトンは自由意志をある程度容認するようになり、ルター派内部に神学論争が起きることになった。彼が1559年に著わした『神学要覧』中に「神人協働説」の立場が明確にされている。メランヒ

²⁶ <http://fsspxjapan.fc2web.com/tridentini/tridentini6.html>. 義認と恵みに対する人間の協力について、ルターやヨハネ・カルヴァンの予定説に対する反論、恩恵の必要を否定するペラギウスの説に反論する形で、この項目が整理されている。

²⁷ リチャード・テラー監修『ウェスレアン神学辞典』(福音文書刊行会、1993年)、p.136-137.

トンは、『神学要覧』において、「人間の意志は聖霊を抜きにしては靈的には何も成就できないのです。すなわち、神が要請するところの、神に対する真の恐れ、真の信頼、神の憐れみ、真に神を愛すること、苦しみや死に近づく中で忍耐と勇敢といったことを」²⁸ と述べ、神人協働説を推奨するために聖霊の働きを強調している。

D. アルミアウスの神学：オランダの神学者ジェイムズ・アルミニウス（1560－1609）によって、「神人協働説」の概念が継承発展されたと考えられる。彼は1576年からライデン大学に学び、1582年に留学してテオドール・ド・ペーズの講義を聴講し、1588年からオランダ改革派として活動し、カルヴァンの予定説を攻撃したコールンヘルトを反駁するために研究を進めるうちに、神は万人に救いを提供し、神の恵みを受け容れるかどうかは各人の自由意志に任されているという、カルヴァンの教説をやわらげる結論に到達した。アルミニウスは、「心と情愛、良い思いを心に注ぐ意志に働き、良い願望を行動に促し、良い思いや考えを実行に移させるこの恵みである。この恵みは、前もって働き、伴う」²⁹ と述べて、先行的恵みについて言及しているように思われる。

E. 英国国教会の伝統：ローマ・カトリック教会や諸プロテスタント教会に対峙するという時代背景の中で、1553年クランマー大主教よって『42箇条』が採用され、1563年に聖職者会議で制定されたカルヴァン主義的な『38箇条』を基に、1571年に『39箇条』が国会で承認されて、それへの同意がすべての公人に要求されることになった。第10条は次の様である。

「アダムの墮罪以後、人間は自分自身の本来の力や善い業によって神への信仰に立ち返り、神を呼び求める姿勢に自らを正すことが出来ない状態にある。したがって、キリストによって神の恩恵が私達の上に働いて、私達が良い志を抱くようになり、またそのような良い志を抱

²⁸ メランヒトン『神学要覧』

https://kiss.kokushikan.ac.jp/pages/contents/0/data/1004533/0000/registFile/1346_2555_014_04.pdf, P. 69.

²⁹ James Arminius, *The Works of James Arminius* (Grand Rapids: Baker Publishing Group, 1986), II : 33.

いた時に私達と共に働いて下さることがなければ、私達は神に喜ばれ、受け容れて頂けるような善い業を行なう力を持たないのである。³⁰

この10条は人間の全的な腐敗を前提に、私たちの上に働いて、良い志、願いを持たせてくださる神の恩恵について述べている。韓永泰氏はウェスレーの先行的恵みに言及しつつ、「ウェスレーの先行的恩寵の概念の根拠となる資料は、16、17世紀の英国聖公会の神学的伝統であった」³¹と述べている。1720年から1724年まで学んだChrist Church Collegeにおいて、彼が先行的恵みについて教えられたと容易に理解できる。1725年に、ウェスレーは英国国教会の司祭になることを決意し、両親サムエルとスザンナにも相談している。³²このことからウェスレーが英国国教会で受けた教育の中で、「先行的恵み」について理解を深めたと言えよう。

受け継いだ神学的伝統の中で、ウェスレーがなぜ先行的恵みを主張するに至ったかについて、W.J.アブラハムは説明を加えている。(1)人は罪に陥り、自分で自分を救うことができない。(2)神だけが罪を癒し、救うことができる。(3)人はこの救いに来て自分の功績を誇ることはできない。(4)人は自由であって、が救われなかったら…その責任を自分で負うべきである。³³ ウェスレーはカルヴァン主義神学という壮大な神学体系と対峙する中で、神の恵みと人間の自由というテーマを真剣に考え、上記の4つの課題を解決しようとした真理が先行的恵みと言える。コリンズも同じように「先行的恵みに関するウェ

³⁰ <http://www.f-frank.sakura.ne.jp/39kajyo.html#10>. 日本聖公会のホームページからの引用であるが、この39条についての解説は興味深い。『39箇条』は英国聖公会の教義的立場を明確にする箇条ではあるが、全教会の信仰告白である「信経」とは違って、「告白」するものではないとあるが、聖公会にとって重要な信仰箇条であることは否定できない。

³¹ 韓永泰『ウェスレーの組織神学(1)』(ソウル神学大学校出版部、2012年)、p.114.

³² 野呂芳男『ウェスレー』(清水書院、1991年)、p.91.

³³ W. J. アブラハム『はじめてのウェスレー』(教文館、2013年)、p.69-70. 初心者向けのウェスレーの紹介と思えるが、ウェスレーの神学が的確に紹介されていて、読み応えのある著作である。

スレーの教理は、全的墮落、恵みによる救い、人間の責任、すべての人への救いの提供という4つのモチーフを矛盾することなく保つことを可能にしている³⁴と述べている。もちろん、先行的恵みはウェスレーの新しい教理の発明でも発見でもなければ、本稿において論述してきたように、豊かな神学的な伝統から受け継いだのである。

Ⅲ. ウェスレーにおける「先行的恵み」の理解の変化と発展

ウェスレーの前に、先行的な恵みを主張する教えが存在していたが、特定の人物や立場というよりも、英国国教会に流れ込んでいた神学的な伝統を受け継いだと言えよう。ウェスレーは英国国教会の伝統の中で教育を受け、生涯、英国国教会の司祭として生きたことから、英国国教会の神学が彼に大きな影響を与えたと推測することは自然である。

神学的な伝統に加えて、1738年5月24日のアルダスゲートにおける心燃える経験は、ウェスレーの神学理解に大きな変化をもたらしたことは言うまでもないだろう。もちろん、ウェスレーの神学は、初期の時代から中期、後期にかけて固定化されたのではなく、一貫して継続された神学と変化発展していった神学があると言える。ロジャーが論じているように、ウェスレーの「先行的恵み」に関する理解も、初期、中期、後期へと発展していっただろう。

A.初期のウェスレー (1725～1738年)：ウェスレーはソフィアとの恋愛問題の挫折故に失望の内にジョージアから帰国し、1738年5月24日、アルダスゲート通りの小さな集会において、心が不思議に燃える体験をした。このアルダスゲートの経験以前の初期の時代にも、ウェスレーは説教を残している。例えば、「心の割礼」(1733年1月1日)、「唯一の動機」(1736年2月39日)などの説教を見ても、救いに関する福音的内容や先行的な恵みに対する明確な教えは見られない。

「心の割礼」は1733年1月1日に、オックスフォード大学の聖マリア教会に

³⁴ Collins, *The Scripture Way of Salvation*, p.45. カルヴァンやルターの神学は最初の2つのモチーフを保持し、予定や選びの教理はなぜすべての人が救われ

おいてなされた。ウェスレーは「神の称賛を受けるような心の割礼は、何から成り立っているかを考えてみましょう。一般的に、それは聖書で〈きよめ〉と呼ばれる、たましいの習慣的な気質のことです」³⁵とホーリネスの優れた定義が示されている。心の割礼であるホーリネスをどのように経験できるかが明確に提示されていないように思える。ロジャーが指摘しているように、オックスフォード時代から、ホーリネスを追求してきたにもかかわらず、初期ウェスレーの救いに関する神学はあいまいであったと言えよう。³⁶

藤本満氏は、初期ウェスレーの「先行的恵み」の理解について「初期のウェスレーは、先行的恵みを主として新生をもたらす洗礼と結びつけていた」³⁷と表現している。ウェスレーが英国国教会の伝統の中に生きていたことを覚えると納得が与えられよう。

B.中期のウェスレー(1938~1765年):アルダスゲートの福音的な経験以来、ウェスレーの説教は大きく変化した。例えば、「信仰による救い」(1738年6月11日)において、ウェスレーは、信仰について次のように説明している。「キリスト教信仰は、キリストの福音全体に対する同意であるだけでなく、キリストの血潮に対する全面的な依存、主の生涯、死、復活に対する信頼、主が私たちの贖いといのちのために、すなわち、私たちのために与えられたいのちと私たちの内にあるいのちをくださったという信頼なのです」³⁸。この説教は、アルダスゲートの経験から3週間ほど経過した説教であるが、信仰による救いというテーマが明確になっている。

中期ウェスレーの関心事は救い、信仰による義認であったが、キャノンは、ウェスレーの救済論は彼の神学全体の源泉だと主張した論文の結論の中で、

ないかを説明しているとコリンズは述べている。

³⁵ 『ジョン・ウェスレー説教 53 (中)』、p.14; BE Works I: 402.

³⁶ Charles Allen Roger, *The Concept of Prevenient Grace in the Theology of John Wesley*. Duke University, 1967, p.93. ロジャーは、ウェスレーの神学全体が漠然としたものであったことを指摘している。

³⁷ Mitsuru Fujimoto, *John Wesley's Doctrine of Good Works*, PhD Dissertation, Drew University, 1986, p. 255

³⁸ 『ジョン・ウェスレー説教 53 (上)』、p.42; BE Works I: 121.

「すべての被造物が持っている先行的恵みと協同して、悔い改めは人自身の行為によってなされると明記することは重要である」³⁹ と論じている。つまり、聖霊は私たちに罪を示し、認罪を与え、悔い改める力を付与する。罪を示し、悔い改め、主キリストに対する信仰を与えるのは、聖霊による先行的恵みである。

また、ウェスレーは、「自由の恵み」(1740年)を著わした。彼は「私たちの救いの出どころである神の恵み、愛は、すべてにおいて無代価であり、すべての人に無代価である」⁴⁰と述べている。予定の教理が聖書の教理ではなく、キリスト教の幸福を破壊する危険な教えであるとウェスレーは論じ、良い行ないや伝道に対する熱心さを奪い取りかねない教えが、予定の教理であると述べている。

モラヴィアンのアンティノミアン的な教えからメソジストを守るという意図をもって、ウェスレーは1746年「恵みの手段」という説教を著わし、その中で、先行的恵みについて「<恵みの手段>は、神によって定められた外的なしるし (sign)・言葉・行為であり、この目的のために一神が先行的な恵み、義認や聖化の恵み (grace) を人々に伝達する通例の管となるよう一定められたものと私は理解しています」⁴¹と言及している。義認や聖化の前に、神が先行的な恵みを備えてくださることは特殊なことではなく、通例のことであると彼は主張している。

ウェスレーは、1746年チャーチ氏に答える形で『メソジストの方針の更なる説明』を著わした。その中で、ウェスレーは「すべての教理を包括する私たちの教理は、悔い改め、信仰、ホーリネスの3つである。最初の悔い改めは、宗教の玄関先であり、悔い改めが玄関であり、ホーリネスは宗教そのものであ

³⁹ William Ragsdale Cannon, *The Theology of John Wesley with Special Reference to the Doctrine of Justification* (New York: Abingdon Press, 1984), p. 248.

⁴⁰ Works III. p. 373.

⁴¹ 『ジョン・ウェスレー説教 53 (上)』 p.403; Works V p.187; BE Works I. p. 381.

る」⁴²と述べている。救いの玄関である救いに導くのが、先行的な恵みと云えよう。

リントシュトレームは、『ウェスレーと聖化』という著書の中で、中期ウェスレーの先行的恵みの理解について記している。「この概念は、1738年の直後の数年においては、ただ偶然の形で登場してくるが、まれにしか現れてこない…しかし、時とともに、先行の恵みは、ますます重要なものとなる。そして同時に、カルヴァン主義の選別の教理からのウェスレーの相違、及びアルミニアニズムのウェスレーによる受容が明らかになる」⁴³。個人的な信仰による救いというテーマが中期ウェスレーの説教の前面に出ており、それを強調する中で、中期ウェスレーには先行的恵みの強調が見られる。

C.後期のウェスレー (1765～1791年)：ウェスレーの後期の時代は、メソジスト運動にとって円熟期であった。メソジストの会員も増加し、神学的にも確立期を迎えていた。ウェスレーは、晩年の1785年の説教「**自分自身の救いを全うすること**」において、「生きている人はだれも俗に自然的良心と呼ばれるものを完全に欠いているものはいない。しかし、これは自然ではない。これはより適切に先行的恵み(preventing grace)と呼ばれる」⁴⁴と述べている。彼はピリピ人への手紙2章12～13節に基づいて、「ですから、神があなたの内に働いてくださるように、あなたも今あなた自身の救いを達成することができます」⁴⁵とメソジスト会員を激励している。神の恵みは救いの前だけでなく、救いの後も信仰者の内に働き続けているのである。

ウェスレーは1784年、英国国教会の39条の宗教簡条からカルヴァン主義的な内容を取り除き、24条の宗教簡条に整理し、メソジスト年会によって採択された。第8条「自由意思」は以下の通りである。「アダムの墮罪以来人間の

⁴² Works VIII: p. 472; Theodore Runyon, *The New Creation: John Wesley's Theology Today* (Nashville: Abingdon Press, 1998), p. 27.

⁴³ H.リントシュトロレー『ウェスレーと聖化』(新教出版社、1989年)、p. 67。ウェスレーの聖化を扱う中で、1章で聖化と人間の本性を論じ、その中で先行の恩恵と救いについて説明している。

⁴⁴ Works, VI p. 512.

⁴⁵ *Ibid.*

状態は、自らの自然的な力と業で信仰に立ち帰り、神を呼び求めることはできない。従って、キリストによって前もって備えられた (preventing) 神の恵みなしに、神に喜ばれ、受け入れられる良い業をなすことはできない。⁴⁶ この24か条は、アメリカのメソジストたちにも基本的な教理を示す意味もあったが、先行的恵みを含むアルミニアン的要素が明確に示されている。

1788年、ウェスレーはコリント人への手紙第二1章12節に基づいて「良心について」という説教を著わしている。その中で、彼は「良心」について「それは、すべての人の中に見られる。適切に言えば、自然的なものではなく、自然的な賜物に勝る神からの超自然的な賜物である」⁴⁷と記して、神が恵みの助けを持って良心を通して、働きかけ、救いに導かれることを論じている。聖霊の助けなくして、良心は正しく機能しないし、聖霊は人の良心に働きかけるのである。

藤本満氏は『ウェスレーの神学』の中で後期ウェスレーの先行的恵みに関する理解について「後期のウェスレーは、先行的恵みを救いの順序全体の中で見つめ、その救済論的価値を高く評価する傾向にある。その代表的な表れが説教『自分自身の救いを全うすること』(1785年9月—10月)である」⁴⁸と的確に述べている。アウトラーは、「この説教は、神と人との交流の神秘の最も完全な、注意深い解説であり、先行的恵みと人間の力の逆説の最も微妙な調査である」⁴⁹と興味深い注釈をしている。ウェスレーがメソジスト運動の指導者として経験を重ねるにつれて、先行的恵みに関する彼の理解も成熟していったと頷くことができよう。

ウェスレーは1746年に発行した説教集の序論で、「私は、一つのことを知りたい。天への道、あの幸福の岸辺に無事に上陸することです。その道を教える

⁴⁶ [https://en.wikipedia.org/wiki/Articles_of_Religion_\(Methodist\)](https://en.wikipedia.org/wiki/Articles_of_Religion_(Methodist))を参照。

⁴⁷ Works VII p.187.

⁴⁸ 藤本満『ウェスレーの神学』(福音文書刊行会、1990)、p. 163.

脚注に中期ウェスレーと後期ウェスレーの先行的恵みの理解が見事に対比されている。中期のウェスレーは悔い改めの観点から、後期ウェスレーは、救いの順序全体の中で捕えていたと的確に整理している。

⁴⁹ Albert C. Outler & Richard P. Heitzenrater, ed, *John Wesley's Sermon:*

ために、神ご自身が天から身を低くして降りて来られました」⁵⁰と述べ、彼の最大の関心事は、天国に到達することであり、救いであった。その意味で、ウェスレーの神学は、救いの順序(*ordo salutis*)という枠組みを用いて整理することが最善であると考えられ、先行的恵みはウェスレー神学において重要な位置を占めると言える。⁵¹ ウェスレーの説教「自分自身の救いを全うすること」(1785年)は、彼の救いの教理の集大成と言えよう。

ロジャーは、ウェスレー神学における先行的恵みを研究した論文の結論として「ウェスレーの先行的恵みはその性質と機能において、彼の主張であるただ恵みによる(*sola gratia*)と人間の関わりに横たわっている神学的原則である。このようなわけで、先行的恵みはウェスレーの思想の重要な、中心的な真理であり、キリスト教神学に対する代表的な貢献の一つである」⁵²と述べている。

結 論

ウェスレーがメソジスト運動を導いて行く中で強調した「先行的恵み」の意義を今日、私たちはどのように捉えたらよいのだろうか。ハーパー氏は「先行的恵みは救いに対して十分ではないと強調することも大切です。もし人がこの恵みを無視したり、拒絶したりするならば、心がかたくなになり、神の働きはなされないでしょう。しかしながら、先行的恵みが人を悔い改めに導く働きをするので、ウェスレーはそれを救いの全体の計画に含めたのです。いつでも、神の働きに優先権を置いたのです」⁵³と説明を加えている。先行的恵みは聖霊を通して働き、人は応答することが求められる。

An Anthology (Nashville: Abingdon Press, 1991), P.485.

⁵⁰ 『ジョン・ウェスレー説教 53 (上)』、p.29; BE Works I:105.

⁵¹ Noboru Umeda, *John Wesley as a Systematic Theology: The Analysis of Wesley's Sermon from the Perspective of Systematic Theology*, PhD dissertation, Newport University, 2003, pp. 239-242. 筆者はウェスレーの神学を「救いの順序」(*Ordo Salutis*)の枠組みを用いて整理し、先行的恵みの例として、律法や良心を通して人に働くことを論じている。

⁵² Roger, *The Concept of Prevenient Grace*, p.291.

⁵³ ハーパー『現代に語るウェスレー神学』、p.38-39.

ウェスレーが先行的恵みに関する総括的な説教や神学論文を残しているわけでもない。⁵⁴ 先行的恵みに関する彼の教えは、説教や日誌、手紙、神学論文、聖書注解などに散りばめられている。三位一体という言葉が聖書の中に見い出されないように、「先行的恵み」ということばが聖書にあるわけではない。聖書の一つのみことばで、先行的恵みをすべて説明しきれものでもないが、聖書の総合的な教えから、この先行的恵みをウェスレーは信じたのであり、ウェスレーの伝統に立つ者は先行的恵みを信じ受け入れるのである。

最後に、先行的恵みの聖書的な根拠と考えられることばを記して参考にさせて頂きたい（エレミヤ書1章5節、エゼキエル書34章11、16節、ルカ19章10節、ヨハネ1章9節、ヨハネ12章32節、ローマ2章4節、ローマ5章6～8節、エペソ2章8～10節、ピリピ2章12～13節、テトス2章11節、1ヨハネ4章19節など）。

確かに人間は罪に汚染され、不道徳や悪がはびこり、救いの希望がないかのように思えるかもしれない。しかし、神の先行的な恵みの故に、どんな人でも救われる可能性があり、救いから除外された人はいない。神の恵みと愛は、今も注がれている。ハーパー氏が「先行的恵みのメッセージは、希望のメッセージです」⁵⁵と述べているように、先行的な恵みの教えは、信仰者に対して、希望と重荷を与え、神の愛への感謝、伝道の重荷を強めることだろう。聖霊を通して働かれる神の先行的な恵みを信じ、期待しながら、前向きに積極的に福音を証していきたいものである。

⁵⁴ Thomas Oden, *John Wesley's Scriptural Christianity: A Plain Exposition of His Teaching on Christian Doctrine* (Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1994), P. 244. オデン氏は先行的恵みがウェスレーの福音的教えの中で重要でありながら、ウェスレーはこのテーマに絞った論文や説教を著わしていないが、「自分自身の救いを全うすること」や「良心について」の説教の中に見いだされることを指摘している。

⁵⁵ ハーパー『現代に語るウェスレー神学』、p. 42.